対話的授業論メモ 9—対話における問いについて議論学から考える

1, はじめに①—問いについての振り返り

本稿では私たちの考える「授業の中の問い」のあり方について、「議論学」 theories of argumentation という学問領域から教えられるものがあるかどうかをみしてみる。まず「授業の中の問い」という問題について簡単に振り返っておく。

授業の中で例えば教師が（あるいは生徒が）問を出し、生徒が（他の生徒が、教師が）答えるとき、答える生徒はかならずしも問う者が出した問を共有せず、それとは“ずれた”違う問いを持つことがある。これは答える生徒の答えが問う者からすると「誤答」「見当外れ」と感じられるときに特に明白になる。答えた側の生徒は必ずしもその問いに自覚的でないが、それは問われたトピックについてその個人がそれまで持っていた関連する経験、知識（「わかりの（常に変化する）履歴」）に基づくある方向性を持った探求である。この問いに生徒自身が、また教師が気づくことがバフチン的な意味での（対話参加者がトピックの真理性について対等の権利を持つ＝共にトピックについてお互いから真に学び合う）対話を引き起こす。その過程をもう少し詳しくいうと、本人は自分の経験、知識に基づいた探求を依り意識的におこなうようになる、またそれ以外の生徒、教師も自分たちの出した、あるいは理解していたものとは違う問いの存在に気づき、考えていく。それに参加者はより深い理解をしていくことができる。

このような事態のことを、「問いのずれ」と、またそれが対象化されることを「問いの気づき」と呼ぼう。「問いのずれの気づき」が、関わり合う者たちがお互いに（自分について、他者について、そしてもちろん世界について）より深く学び、新しい問いを発見し続けていく（バフチンの unfinalizability（完結不可能性）、バフチン、1995）ことを可能にする。

なお授業で問いというと教師の発する「発問」がまず思い浮かぶが、ここでの問いはあるトピックをある角度から探求していくことであり、「問題を設定する」とか「問題化する」ということと同義である。場合によっては「問い」という言葉よりも「問題」という言葉の方がはっきりする場合もあるだろう。「発問」にしても、その背後には教師のこのような探求があるだろう。

「問いのずれ」が生じるのは、「発問」という形で問いが与えられも、あるいは参加者が同じ「問題状況」(Schon, 19??; デューイ, ??) に面しても、複数の参加者のそれぞれの「わかりの（常に変化する）履歴」が異なるからだ。なお「わかりの（常に変化する）履歴」は

問いにとって「問いの地平」(ガダマー、????)となり、問いに方向性を与える。またそれが人にとって異なることが、対話に参加する者を互いに「外在的」(バフチン、????)な存在としていく。

2、はじめに②—議論学をなぜ問題にするのか

なぜ議論学を問題にするのか。まず議論学についてごく簡単に言うと、それは社会のいろいろな領域で人びとがどのように議論をおこなっているのか(事実の記述)、また理性的で説得的な議論とはどのようなものであるべきか(規範の設定)、という問題について多領域的に考える学問であり、1950年代以降いろいろな理論が提出されている。出発点は、議論の中で考えるということがいわゆる形式論理(formal logic。数学の基礎論ともなる。二十世紀初頭にラッセルやフレーゲにより論じられた。公理系からごく単純なルールにより一義的に命題の正否の証明をおこなっていこうとするシステム)に沿って考えるというのとは違う、ということの気づきにある。

普通に議論といえば、そこでは問いと答えという行為が大きな役割を占めているはずだ。では「議論学」も、私たちの上のような問いについての考えに示唆を与えてくれるのではないか。これが素朴ではあるが私たちの一番の問題関心である。

もう一つ。議論と対話というのはどうも違うのではないか、というこれもまた素朴な問題意識が私の中にある。

たとえば以下の対比はある人に紹介してもらったウェブサイトにあったものである(g rape編集部、2018/2020)。ある人(不明)が黒板に書いたものだ。

討論

- ・声の大きい人が有利
- ・違いがあれば責める
- ・考えかたが変わらない
- ・自分の想像の枠を超えない
- ・気まずい雰囲気になる

対話

- ・声の大きさは関係ない
- ・「なぜ、違うのか」を探求する
- ・考えかたが変わっていく
- ・想像を超え、新しい世界を知る

・だんだん楽しくなる

むしろ学術的なものではないが、この討論を議論と読み替えると議論と対話の違いについて一般的にこんなイメージがあるのは私個人の経験からも頷ける。ただこの性格付けはいつてみれば情緒的に過ぎる。私自身は上に述べた問い論から、この2つの違いに次のような仮説を持っている。

議論：問いを明確に一つにしぼっていく。その問いに、結論を出す。

対話：やりとりの中で問いがお互いに違うことを自覚し認めたり、新しい問いに変わっていくことを認める。

上に描かれている2つの違いは、多分にこの基本的な問いの性格から出てくるように思われる。一方では問いを明確にして、論争の土俵をきっちりと定め、そこで勝ち負けを決めていく。他方は、やりとりの中でお互いの問いがずれてきて、新しい問いが出てくる可能性に敏感である。そこに、意外なこと、新しいことが生まれ、勝ち負けというよりはお互いに変化するという意味で学ぶ。さて、議論学での問い論が、ここで想定したような、対話での問いとは異なるものだろうか。

最後に教育との関係で、学習科学などで協働的学習というような概念がもてはやされるようになって以来、議論学の知見を授業場面に使おうとする試みも多くなっている (Andriessen, J., & Baker, 2006; Schwartz & Baker, 2017)。日本の教育研究でも、議論学の中でも古典的なトゥールミン Toulmin とその図式は最近非常によく使われているようだ (google で「トゥールミン図式・授業研究」で検索したところ - 2020/09/12 - 約 10,000 件のヒットがあった)。このこともまた、議論学をみる理由の一つである。

議論学はそれ自体で非常に広範な研究分野を形成している (大部のハンドブックが複数出版されている。van Eemeren, Garssen, Krabbe, Henkemans, Verheij, & Wagemans, 2014; Walton, 2006)。またその古典であるトゥールミン、ペレルマン Perelman はもとより、より新しいファン・エイムレンの理論 (ファン・エイムレン、スヌック・ヘンケマンズ、2018) についても邦訳がでている。この分野についての概説を書くことは簡単なものでも筆者の力量を超えているし、またその必要もないだろう。したがってここでは、あくまでも私たちの関心事である「問いのずれ」について筆者が発見し得た関連についてのみ取り上げる。

ただそのためにも、議論学の中の一つの特徴を確認しておく必要がある。論者達 (van Eemeren, Garssen, Krabbe, Henkemans, Verheij, & Wagemans, 2014; Schwartz & Baker, 2017) によると議論学の理論は、独話的 monological、対話的 dialogical の二種類に分け

られる。この分類はバフチンの意味でのものではなく、筆者の関心からすればごく単純な意味であって、議論が複数の参加者の間でおこなわれているという事実が、理論の中に明示的に組み込まれている（対話的）かいない（独話的）かということである。古典的なトゥールミンやペレルマンが独話的であり、ファン・エイムレン達やウォルトン達が対話的とされている。

結論の一部を先取りすることになるが、「問い」について論じているのは（あくまでも筆者の見た限りだが）このうち対話論的な者であるウォルトン(Walton, 2000. 2006)だけである。したがってウォルトンを以下扱うが、ただ独話論的な理論家でもトゥールミンについてもそこには潜在的にある問い論があってそれについて考えることも示唆を与えるので、みてみよう。それが日本の教育研究でよく使われているということも副次的な理由としてある。

3、トゥールミン

トゥールミンのものは日本の教育研究でもよく知られているが、議論の関係上最低限の解説をしておく。トゥールミン(1958/19???)にとって議論とはある命題を主張し、守ることである。その研究は議論の流れの組み立てに焦点化し、説得的な議論であるためにはどのような構成要素が議論に必要なのかを論じる。上に述べたように現在の論者達によって独話的とされているが、議論が複数の論者のやり取りであるということを見出し、ある主張をしようとする側の議論の構造だけに焦点が当たっている。

そこで主張が正当化されるためにどのような手段があるのかをまとめたものがいわゆるトゥールミン図式である。正当化の手段として、主張 (claim) を基礎づけるために参照される事実である論拠(ground)、論拠と結論を結び、その移行を権威づける保証(warrant)、移行の正当化の強さを表す限定子(qualifier)、保証の一般的な正当性が避けられねばならない状況である反駁(rebuttal)等がある(それぞれの特徴付けは氏川 2007 から)。

たとえば島崎（1986）より事例を借りると、

主張：彼はペニシリン治療を必要とする。

論拠：彼は肺炎だ。

（主張と論拠の間にある）限定子：多分

（上の論拠が論拠となる）保証：肺炎にはペニシリン治療が必要だ。

（限定子を通して主張と論拠の間につながる）反駁：彼がペニシリンアレルギーでなく、

他に何の不都合もなければ。

といった次第である。

では問いについてはどうか。複数の参加者間のやり取りという面を無視しているのだから、やりとりの中での問いと答えというような意味では問いは当然焦点化されない。ただし、形式的にはこれも問いを考えることができる。たとえば「論拠」に対応するところでは質問者が「それはどんな事実に依るのですか？」と質問しており、それに対して「論拠」が解答者＝主張者から解答される、というような形をしているといったようにだ。実際島崎（1986）はそのように主張する。ただ Schwartz & Baker (2017) が指摘しているように、この場合には質問者の方は中身のない、図式から事前に決定された質問をしているだけで、やりとりへの寄与はまったくなく、実質的内容はすべて回答者によって与えられている。したがって形式的には二者間のやりとりがあっても、**実質的にはやはり一人の、一つの主張の世界の中で終始している。**

「問う」とは私たちにとって「問題化」「問題設定」ということでもある。そういう点からトゥールミンをみていくとどうなるか。例としてあげた場合だと、この議論での問題は「彼はペニシリン治療を必要とする」という「主張」が正しいか、というものとなる。トゥールミンの理論は、この主張を説得的にいうにはどんな手段が必要か、ということに関するものであり、そこで「論拠」とか「反駁」を考えていくことになる。ということは、ここでは「主張が正しいか」という最初の出発点である問題は、所与として与えられている、ということだ。そもそも問題がどのように設定されるべきかとか、人によって同じ問題状況（デューイ）でも異なる問題の捉え方がある、とかいう話は理論の枠外になる。議論が一つの問題＝問いの内部で終始するものとして理論が構築されている。

双方の点で、トゥールミンの理論では「問いのずれ」といった話題が最初から排除されていることがわかる。ある問いが確定した後、それを説得的にするのはどうするのか、ということが彼の問題意識である。またそれは議論参加者の一方である主張者のある主張、言い換えると一つの問いの説得に終始している点で、「外在性」というものがまったく想定されていない理論である。その意味で、これはバフチンの意味でも独話的な理論である。

4,ウォルトンの場合①

今度はウォルトンの考えをみていく。ただしウォルトンの理論はファン・エイムレン van Eemeren たちのプラグマ・弁証法 pragma-dialectic 理論¹との親近性が高く、また一部援

¹ ファン・エイムレン&スフック・ヘンケマンス（2018）の訳者達はこれに「現実的論理

用している部分もあり、本稿の問題意識に関連するところをちょっとだけ紹介しておく。

ファン・エイムレンによれば、議論とはある立場(standpoint at issue)の主張者と、その立場を理解できないとしたり、それに疑いを持つ反対者の間の意見の相違を、議論のいろいろな手段を使いやりとりすることを通して解消することである。この過程を彼等は4つの段階に分けている。第1段階は対立(confrontation)で、一つのあるいは複数の立場と、その立場の拒否の間での対立を通して意見の違いが明らかになる段階である。ある立場がそれに対する疑いに出会ったり矛盾に陥ったりして、意見の違いがおこってくる。第二段階が開始(opening)であり、主張者と反対者というそれぞれの役割が両者の間で合意される。この後議論の中で主張者は立場を守らなければならない、反対者はそれに対して批判的に応答していかなければならない。この段階で、両者は彼等の位置をはっきりとさせ、以下での見解のやりとりの基礎となる共通の出発点が決定される。その次が議論(argumentation)段階で主張者は自分の立場を反対者の批判的な反応に対して防衛する。反対者が主張者に議論に十分に納得しなければ、主張者からさらなる議論が、反対者の反応への批判的な反応によって引き出される。最後が終結(concluding)段階で主張者の立場が反対者の批判的な反応に対して十分に守られたか、主張者と反対者が決定する。

ウォルトンに戻ると、彼は自分の理論を dialog theory 対話理論とよぶ。ここでの「対話」の意味は先に述べたように議論が複数の参加者の寄与からなっているという意味だ。ウォルトンの場合には特に、グライス Grice の、論じる(arguing)とは二人の話者の協働的な会話への貢献である、という規定に基づいている (Walton, 2000 より)。

ウォルトンは、問うこと(asking question)により焦点化し、それが議論(彼は対話とするが、以下議論と読み替える)の中心な契機だとしている。たとえば議論とは彼によれば問いと答えの一連のつながり(connected sequence)である。議論を前進させるためには正しい(right)問いを問い、他者の問いに対して適切に反応することが重要である、ともいう。批判的な議論ができるためには、問いと答えの技術を学ぶことが重要であるともいう(いずれも 2006)。

ウォルトンは問いの分類(たとえば yes/no question と why question といった)模しているが、筆者の立場からすると最も興味深いのは、彼が問いには必ず「前提」presupposition

学」という言葉を当てている。van Eemeren et al.(2016)(p.520)によれば、pragma は言語の実践的な運用に関わる学である語用論 pragmatics から、dialectic は意見の違いの解消を目指す方法としての弁証法 dialectic からきているようであり、その出自を示すためあえてプラグマ・弁証法とした。なお他の用語は基本的に翻訳にしたがっているが、他の部分とも共通するような場合には筆者にとってより自然だと思われるものに変更してある。

があるとする事である。前提は問う側、答える側に共有されているはずで、共有されないと議論が豊かに前進しない。特に答える側が共有しているかどうかを確かめずに議論を進めると不利に陥る。

前提とはどういうものか？例えば次のような問いの場合。

A:山田さんはいつ東京を発つのか？

Aさんのこの問いには、「山田さんは東京を発つ」ということは当然のこと、既知のこととなっている。これが前提である。

B1: 今日の午後です。

B2: あ、よく知りません。

これに対してBさんがB1、「今日の午後です」と答えた場合はもちろんBさんは「山田さんは東京を発つ」という前提を共有している。B2「よく知りません」と答えた場合でも、そしてこの場合実はBさんはそもそも山田さんが東京を発つこと自体について知らなかったのだからこう答えたとしても、Bさんが知らないのは「いつか」ということになり、「東京を発つ」という前提自体は持っていることになる。実際、前提についてのウォルトンの特徴付けは、「答える側が問いに対して直接的な回答を与えることによって、答える側がそれを正しいと保証を与える（コミットする）命題」ということになる。ここで「直接的な回答」direct answerとは、反論などで反応するという事ではない、ということだろう。

なお、ファン・エイムレンたちの議論の段階論の第二、開始段階では、議論の参加者達が議論での見解のやりとりの基礎となる共通の出発点を決定する。この共通点の少なくとも一部はウォルトンのいう「問いの前提」だろう。

5, ウォルトンの場合②ーガダマーの「問いの地平」との類似性と違い

ところでこの「前提」概念は、それが何を指しているのかという点からみると、ガダマーの「問いの地平」概念と似ているところがあるように思われる。もちろん両者にはいわばスケールとでも言うべきものの違いがある。ガダマーが視覚メタファを用いて説明する地平とは、問う者がいる「ある地点から見えるすべてのものを包み込む視界」であり、筆者流に言い直せば問う者の持つその時のユニークな経験・知識、つまり「わがりの（常に変化している）履歴」ということになる。これに対してウォルトンの「前提」とは「問い」の一文の背後に想定される意味に過ぎない。しかしガダマーにとって問うとは「未決性の状態におく」ということだった（ガダマー、2008, p.562）。そして「問いの地平」とは未決

の部分と対比的に既にわかっているところで、それが対象のどこが未決かを決め、対象を探る方向性を決めるものだ。ある部分はわかっている、それを前提にしてそうではない部分が問いとして意味を持つ、という点ではそれはここでの問いの「前提」と同じだ。

だが、その働きや意義という点からみると、両者はかなり異なる。まずガダマーの場合、そしてそれをさらに利用している私たちの場合、問う者と答える者の「問いの地平」が違ふことが積極的な意味を持つ。「地平の融合」をいうガダマーの場合であってすら、まずは地平が異なることが、新しい理解を作り出す。さらに私たちにとっては問いの地平の違いは問いのずれとして、そこから対話が生まれてくる源泉である。バフチンの「外在性」の論点でもある。

これに対してウォルトンの「前提」の場合には、問う者と答える者の「前提」は共通であることが望ましいと考えられている。少なくとも、それが違ふことに、両者それぞれの理解を豊かにするというような働きの可能性は考えられていない。

ウォルトンの関心が「前提」の共有の確認にあることをよく示すのは、彼のあげている「誘導質問」(loaded question)の場合である。一方の問いの中に、答える側が想定していない、かつそれを認めてしまうと答える側の主張を崩してしまう「前提」が隠されているような問いである。ウォルトンの挙げている事例では、アメリカのレストランなどでの慣行であるチップについて、二人が次のように議論している。

ボブはチップ賛成派で、

ボブ：チップは従業員のサービスの素晴らしさを讃えるものなので、従業員の自尊心を高める、

といった。それに対してヘレンが次のように反論した。

ヘレン：人を物みたいに扱うのが、どうしてその人の自尊心を高められるの？

ヘレンの問いには、「チップをあげるとは人を物のように扱うこと」という命題が前提として入っている。しかしこのことについて、これまでボブとヘレンの間では話されてなく、これは前提として共有されていない。しかしヘレンは、これがあたかも共有された、二人にとって当然の前提のように問うている。ここでボブが、「チップをあげるのは人を物みたいに扱うこと」とは私は考えていない、といわずに、「なぜチップをあげるのがその人の自尊心を高めることができるのか」という方向で答えてしまうと、ボブは自分で気づかずに、自分がこれまで認めていない、そして自分の主張を弱める方向の命題を、認めてしまうことになる。したがってボブは、自分が認めてないことを相手が前提としていないかどうか、

気をつけないと論争に負けることになる。この場合、ボブとヘレンの前提は違っている。しかしここでは、違いは一方が仕掛ける罠である。他方はそれに気づいて、前提を同じだということを確認していかなければならない。前提の違いは双方が豊かな理解を生み出すことではなく、一方のルール違反、他方の不注意として捉えられている。というわけで、ここでは前提はもっぱら両者間で等しくあるべきものなのである。

このようにみえてくると、ガダマーの「問いの地平」概念に似た「前提」概念を用いつつも、ウォルトンの関心はまったく別のところにあることが明らかである。議論では参加者が「前提」を共有することで、議論を理に沿って進めることができ、それによってフェアに、どちらが正しいか（むろん、どちらも正しい、どちらも誤りという場合もあるだろうが）決めていくべきものである、とここでは考えられていると書いていいだろう。「前提」概念の提唱も、議論のルールに反するようなやり方を発見するためという面が大きいだろう。

言い換えれば、彼が大事にしているのは問いの「前提」が共有されていることの確認であり、問いの前提が共有し、問いが確定した後どう議論が進行していくのか、というところに焦点があるということではないか。つまりウォルトンは「問いのずれ」とか「問いのずれの気づき」といったことがらにどうやら気づいていない。同じことは彼だけではなく、ファン・エイムレン達の場合にもいえるように思われる。その段階論で、前提の共有が第2段階でおこなわれ、その後の第三段階として議論の段階となっているのは、問いの確定が議論の前段階であり、議論の主要部分ではないということだろう。

6、まとめると

このように現在の議論学は、少なくとも筆者の調べた限りでは「問いのずれ」とか「問いのずれへの気づき」という事柄にまったく無関心であり、研究の方向は「問い」が確定した後でのある主張の確かさを確定するための技法（トゥールミンの場合）や、「問い」を確定できない場合の問題点（ウォルトンの場合）に向かっている。「問いのずれ」「問いのずれへの気づき」の重要性、豊かさは気づいていない。

少なくともウォルトンやファン・エイムレン達の理論でならそれを扱うことは可能かもしれない。たとえばファン・エイムレン達の議論の段階説での第1, 2に議論の問題設定現在では筆者の調べた限りで無縁のようである。このような理論を教育で、例えばある授業の分析のツールとして使用することがまったく無意味というわけではないだろう。トゥールミンの図式でも、「問いのずれ」についての問題意識が明確にあれば、一連の議論があ

る一つの問いをめぐるものなのか、それとも異なる問いが生じているのか、見分けるのに使用できるかもしれない。しかしそのような問題意識がなければ、これらの理論からは議論での「問い」を一つに明確に統一し、共有することを強調する方向性が出てくることになるだろう。というわけで、最初に設定した私の仮説はとりあえずは正しかったように思われる。

「問い」を一つに統一し、共有することが常に絶対的に問題だ、ということではもちろんない。例えば実務的な会議で、何か一つの政策を決定する必要がある場合にはこれは大事だろう。そのような場合には、他の人にとって終わった問いを蒸し返したり、なにか見当違いのように思われる問を出したりすることは、上にウォルトンが述べたような誘導質問をおこなうこと同様に、はなはだ好ましくないことだろう。「問いのずれ」はそのような場合には効率的な議論の邪魔になる。

しかし教育の場面ではどうか。「問い」を一つに統一するための具体的なやり方として、「対立を明確にする」というやり方がある。これが参加者各自の立場を明確にし、議論をわかりやすくする効果は教育でも有効だ。だが一方その中で各自の「問題のずれ」が圧殺されてしまう可能性がある。特に「見当違いの答え」「間違っただけの答え」の場合にそうである。実務的な場合でなら、そのような答えは効率的な意志決定の邪魔として排除していいだろう。だが教育の場合にはそういうわけにいかない。

というのも教育の場合には、議論の目的は多くの場合一つの選択肢への意志決定ではなく、参加する各自が議論を通して他者の考え、問いと出会い、自分の「わかりの（常に変化していく）履歴」と関係させ、自分の考え、自分の問いをはっきりさせ、発展させていく経験を持つことにあるからだ。「問いのずれ」は自分の「わかりの（常に変化していく）履歴」が各人にユニークなものであることから生じるのであり、「問いのずれへの気づき」がその各自のユニークさを自覚させ、互いに学び合い互いを豊かにするよい機会を与えるからだ。現状の議論学を授業で用いるためには「問いのずれ」を意識しつつ、よほど工夫していかないと、「議論のわかりやすさ」というわかりやすい罠に陥ることになるだろう。

文献

（本編以前の『メモ』で引用されたものは省略）

Andriessen, J., & Baker, M. (2006). Arguing to learn. In R.K. Sawyer, (Ed.). The Cambridge Handbook of the Learning Sciences, 2nd ed. chap, 22, pp. 439–460. New York, NY: Cambridge University Press. (訳)富田英司 (2016).学ぶために議論する, In (監訳)大島純・森敏明・秋田喜代美・白水始 (編訳)望月俊男・益川弘如 学習科学ハンドブック

(第2版) 第2巻 北大路書房

Baker, M. J., Andriessen, J., & Schwartz, B. B. (2019). Collaborative argumentation-based learning. In N. Mercer, R. Wegerif, & L. Major (Eds.) *The Routledge International Handbook of Research on Dialogic Education*.

chap. 6. London: Routledge.

Perelman, Ch. (1977). *L' empire rhétorique: Rhétorique et argumentation*. Paris:

Librairie Philosophique J. VRIN. (訳)三輪正、(1980). *説得の論理学—新しいレトリック*. 理想社.

Schwartz, B. B., & Michael J. Baker, M. J. (2017). *Dialogue, argumentation, and education_ history, theory, and practice*. Cambridge University Press.

嶋崎隆(1986). 立証の構造について:「トゥールミン図式」を中心にして. *一橋論叢*, **95(3)**, pp. 467–475.

Toulmin, S. (1958). *The use of argument*. Cambridge University Press. (訳)戸田山和久・福澤一吉 (2011). *議論の技法: トゥールミンモデルの原点*, 東京図書.

氏川雅典(2007). トゥールミンの議論モデルの変容—批判から寛容へ, *ソシオロゴス*, 31, pp. 1-19.

van Eemeren, F. H., Garseen, B., Krabbe, E.C.W., Henkemans, A. F. S., Verheji, B., & Wagemans, J. H. M. (2014). *Handbook of argumentation theory*, Dordrecht: Springer.

van Eemeren, F. H. & Henkemans, A. F. S.(2017). *Argumentation: Analysis and evaluation. 2nd ed.* Taylor & Francis. 松坂ヒロシ・鈴木健 (訳) . (2018). *議論学への招待—建設的なコミュニケーションのために*. 大修館書店.

Walton, D. (2000). The place of dialogue theory in logic, computer science and communication. *Synthesis*, 123, pp. 327–346. DOI: 10.1023/A:1005237527730

Walton D. (2006). *Fundamentals of Critical Argumentation*. Cambridge: Cambridge University Press.